取材日：2015年３月14日

糖尿病

尾張北部医療圏

糖尿病センターリニューアルを契機に循環型糖尿病地域医療連携を稼働させる。

Point of View

① 市民病院と医師会の構想が一致し、誕生した春日井糖尿病研究会
② 春日井糖尿病研究会を接点に広がった顔の見える関係
③ 糖尿病センターリニューアルを機に連携を完全な循環型に発展させる
④ 合併症対策のため眼科疾患や口腔ケアスクリーニングの充実

春日井市民病院副院長／医療連携室長／栄養管理室長 佐々木 洋光先生
春日井市民病院糖尿病センター長 松田 淳一先生
内藤内科院長 内藤 耕太郎先生
やまだ内科クリニック院長 山田 博豊先生
石川内科クリニック院長 石川 進先生

～新糖尿病センターまでの経緯～ あふれ返る外来患者で診療の質低下の懸念

2014年６月、春日井市民病院の糖尿病センターが大幅な拡充を果たし第二のスタートを切った。同院の旧カルテ庫跡地の約200m²のスペースに、診察室３、療養指導室（糖尿病相談室）２、フットケア処置室１、処置室１を持つ新センターが誕生したのだ（血管内治療センター〈血管外科診療室１〉と血管検査室が併設）（【資料１】）。

同院副院長であり、同センター初代センター長だった佐々木先生が解説する。

「2009年７月に医療環境の変化に適応すべく誕生したのが旧糖尿病センターでした。糖尿病外来に３名の糖尿病療養指導士資格保有看護師を配置したものの、指導スペース等の専用設備などが整っている状況ではありませんでした。自ずと受け入れ患者数の上限も引き上げられず、医療スタッフの質には自信があるが、量をこなす手立てがないジレンマを感じていました」（佐々木先生）

診察室や指導室の不足という設備面の限界で診療の効率が落ち、地域医療連携にも悪影響が出るようになった。

「紹介患者を含めた新患を再診予約患者と分けられなかったので、紹介いただいた患者さんに、混雑時には２時間以上も待っていただくしかな

左から佐々木先生、松田先生、内藤先生、山田先生、石川先生

かったのです。紹介状を書かれたかかりつけ医の先生も、患者さんから『待たされて困った』と報告を受ければ、次の紹介に二の足を踏むのも当然です。

新センターとなって以降は、再診予約患者と新患を分けた診察が実施されています。結果、外来患者が、月間1,400～1,600名にまで増えましたが、診療時間も待ち時間も短縮しています」（佐々木先生）

【資料1】

糖尿病センター

食事指導などが行われる糖尿病相談室

糖尿病足病変を治療するフットケア処置室

糖尿病療養のアドバイスなどを流すモニター

3部屋ある診察室と待合スペース

糖尿病医療の変革期に病診のリーダーが出会う

糖尿病医療を牽引し、糖尿病センターも生み出した佐々木先生に糖尿病地域医療連携への考えを聞いた。

「私は1997年に当院に着任しましたが、当時、地域医療連携はまったく私たちの視野に入っていませんでした。文字どおり、ひと昔前の糖尿病専門医は、患者さん一人ひとりに多くの時間を割き、徹底的に診るのが誠意だと信じて疑っておらず、いわゆる『抱え込み』をしてしまっていたのです。

しかし、2003年に内科部長になったころ、そういった考えをあらためざるをえない体験をいくつもしたように記憶しています。端的に申し上げれば、外来患者のオーバーフローを止められなくなりました。

症状の重い患者さんを急性期病院が引き受け、安定した患者さんはかかりつけ医の先生に引き受けていただく役割分担が必要だと痛感させられ、逆紹介先の医療機関探しにかなりの労力を割くようになりました。

あれが私自身、そして当院にとっての糖尿病地域医療連携の目覚めだったように思います」（佐々木先生）

時を同じくして、内藤先生が春日井市医師会を動かした。

「私は、当時すでに他の複数の基幹病院と糖尿病地域医療連携を展開していましたが、春日井市の医療の柱はあくまで春日井市民病院であり、同院が積極的に連携に乗り出すまでは待つべきとの思いがありました。ですから、春日井市民病院と我々の糖尿病地域医療連携を展開するための具体的な方策が、次々とかたちになっていくのはうれしい限りでしたね。2004年10月には、医師への啓発を目的に学術講演会と症例検討会を行う第１回春日井糖尿病研究会を開催するにいたりました」（内藤先生）

内藤先生、佐々木先生が、ともに世話人としてたずさわる同研究会は2015年３月時点で通算26回の開催を重ねている。佐々木先生は、これまで学術講演会で演者の役割も引き受けている。

「開催してみると、１回に40～50名の参加者がある盛況ぶりに驚かされました。地域のご開業の先生方が糖尿病患者を抱え、診療方針などに悩んでいるのは知っていたつもりでしたが、ニーズは私たちの想像以上だったのです」（内藤先生）

「内藤先生のお声がけから地域で活動する６名の糖尿病専門医の先生方がご尽力くださり、春日井糖尿病研究会が誕生して地域医療連携が急速に発展しました。

研究会には、現在、多いときにはメディカルスタッフも含めて100名を超える参加があります。地域の皆

さんの、糖尿病への危機感の大きさを実感させられています」（佐々木先生）

2012年４月から２代目センター長を務めている松田先生は、研究会発足当初の苦労を推し測る。

「研究会に初めて参加した際、病診間で症例を活発に検討し合う光景に感動しました。経験したことのないすばらしい場の雰囲気を感じるにつけ、立ち上げに骨を折られた佐々木先生、内藤先生をはじめとした諸先輩方のご苦労に畏敬の念を抱きます」（松田先生）

研究会を通して広がった顔の見える関係

同研究会を通して、医師の間に顔の見える関係も築かれていった。

「顔の見える関係の効力は、絶大と言えるでしょう。つまり患者さんを紹介する側の心理として、紹介先の医師の顔が思い浮かべられ、どんな診療を行っているかを実際に目で見ていると安心の度合いが明らかに違うでしょう」（佐々木先生）

山田先生は、春日井糖尿病研究会に第１回から参加し、春日井市民病院との間に紹介、逆紹介の症例を何例も重ねている。

「私は、2000年に春日井市西高山町で開業して、15年目になります。卒後、血液内科を専門としてきました。現在は、いわゆる総合内科的な外来で糖尿病をはじめ、いろいろな患者さんを診させていただいています。

ここ数年、新規の糖尿病治療薬が紹介され、さらに深化した糖尿病治療の時代となりました。糖尿病の患者さんは増える一方で、『血糖コントロールの質』が問われ、専門家のアドバイスや専門治療科との連携がますます必要とされます。春日井糖尿病研究会の誕生はとてもタイムリーなもので、ここまでの10年余り、多くのことをいっしょに学ばせていただきました」（山田先生）

【資料2】

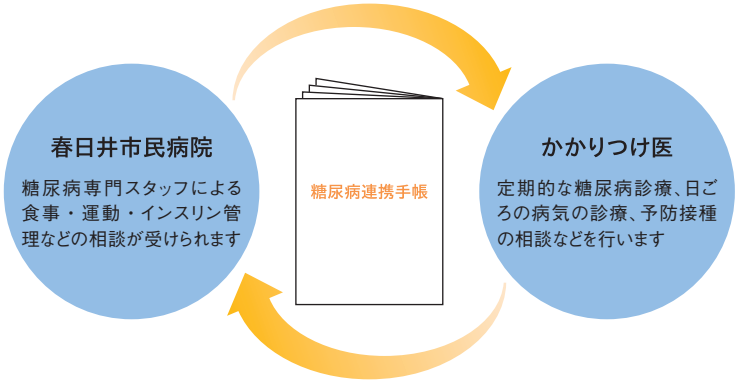
糖尿病地域連携診療の仕組み

糖尿病地域連携診療とは

糖尿病地域連携診療は、「かかりつけ医」と「病院」が連携し、質の高い糖尿病診療を行います
日常の通院はかかりつけ医を、半年ごとに春日井市民病院を受診します

次のような患者さんが対象となります

- インスリン治療を続けている方
- 合併症の定期的な検査が必要な方
- 妊娠を希望する方
- 栄養指導が定期的に必要な方　など



病院受診日のスケジュール

9：00　来院後、採尿と採血を行います

栄養指導　看護師面談　検査結果説明

11：00　診察

11：30　眼科受診　※眼科は医師が必要と判断したときのみ受診

春日井市民病院との糖尿病地域医療連携は、軌道に乗っているかとの質問には。

「順調だと思います。医療連携においてもっとも重要な点は『情報の共有』です。糖尿病治療は、個別に目標を設定していく、いわゆる『治療の個別化』という方向に進んでいると感じます。今後も、個々の患者さんの医療情報を共有しながら、治療に難渋する症例には佐々木先生や糖尿病センターと緊密に連携し、より良き糖尿病治療を提供したいと願っています」（山田先生）

石川先生は、春日井糖尿病研究会発足後の2005年に春日井市南下原町に開業してすぐに連携に加わった。

「私は消化器内科が専門で、糖尿病の専門医資格はありませんが、糖尿病の患者さんを断りはしません。患者さんにとって医師は医師であり、『なんとか助けてほしい』と祈るような

気持ちで近所のクリニックの門を叩くのですから。

私には、春日井市民病院と同院糖尿病センターがあり、春日井糖尿病研究会があるのは福音です。食事生活指導や検査入院など、こちらの紹介目的を尊重して、直接、糖尿病センターで診ていただける利用しやすいシステムがある点も、たいへんありがたいです」（石川先生）

石川先生は、“糖尿病地域連携診療（後述）”で２人主治医制となる患者への好影響も見逃せない様子だ。

「かかりつけ医である私とのコミュニケーションを深める中、患者さんは悪い意味で治療に慣れてしまいがちです。『石川先生はああ言うけど、まあ、いいか』という油断が、どうしても生まれます。それが、数ヵ月に一度、佐々木先生に受診し、専門医としての適切な指摘や指導を授けられると見事に是正されます。

よく、『地域全体で疾患を診る』との表現を耳にしますが、“糖尿病地域連携診療”では、それを体現していると思います」（石川先生）

佐々木先生は、石川先生の「地域全体で疾患を診る」への見解に全面的な賛意を示す。

「糖尿病はすでに、専門医が患者さんを抱え込み、専門医だけで診る疾患ではありません。当院の糖尿病センターが、かかりつけ医の先生方にとって、『使いやすい』、『頼り甲斐のある』存在となり、患者さんに必要なサポートをかかりつけ医の先生方の判断で引き出してもらえるツールになればいいと思っています」（佐々木先生）

循環型連携への発展 合併症対策も充実

新糖尿病センターの誕生を機に、情報共有ツールとして日本糖尿病協会が発行する糖尿病連携手帳を用いた“糖尿病地域連携診療”を始めた（【資料２】）。

この連携は完全なる循環型地域医療連携で、2015年３月現在、16名の患者が利用している。将来的には、オリジナルな地域医療連携パスの開発も構想されている。

「糖尿病センター拡充により、循環型の連携を自信を持ってまわせる体制ができ上がり、看護師・薬剤師・管理栄養士・理学療法士からなる糖尿病療養指導チームが、センター内を生き生きと動きまわっています。

体制整備で、たとえば、医師事務補助作業者に来院患者の眼科受診状況をチェックしてもらい、未受診がわかった患者さんにアラートを出すスキームも確立できました」（佐々木先生）

松田先生は、新センター誕生と同時に始まった循環型地域医療連携にさまざまな期待を寄せ、具体的な施策を思い描いている。

「合併症のスクリーニングのプライオリティは、たいへん高い。眼科受診状況をチェックし、アラートを出すスキームに続き、口腔ケアのチェックと受診勧奨も必要だと佐々木先生と話し合っているところです」（松田先生）

新センターを見学した際の感想を内藤先生が語ってくれた。

「待ち時間が減り診察時間が増え、患者さんの満足度が上がっているのが待合室全体の雰囲気でよくわかりました。待合室に糖尿病療養指導士らしきスタッフの姿があり、患者さんにお声がけしている風景は『しっかりと機能している』糖尿病センターならではのものでしょう。

センタースタッフの充実した顔も見て、『顔の見える関係』が医師同士だけでなく、医師と連携先のスタッフの間にまで広がり、地域の糖尿病医療の質がジワジワと底上げされていく様がイメージできたのが印象的でしたね」（内藤先生）

糖尿病センターと、春日井市の糖尿病地域医療連携の将来について、佐々木先生が展望を示してくれた。

「眼科・歯科合併症診療についても、当院がすべて担うには無理があります。患者さんの自宅近くに連携クリニックを確保し、『点で診る』から『面で診る』への変化を図り、患者利益を拡大させていく計画です。

当面は、かかりつけ医の先生方が当センターを糖尿病医療のための便利なツールとして使ってくださるよう日々努力し、徹底的に利用し尽くしていただけるような状況をめざします」（佐々木先生）

春日井市民病院
〒486-8510
愛知県春日井市鷹来町1-1-1
TEL：0568-57-0057

内藤内科
〒487-0013
愛知県春日井市高蔵寺町4-6-12
コスモスビル1F
TEL：0568-52-3000

やまだ内科クリニック
〒486-0911
愛知県春日井市西高山町1-7-17
TEL：0568-34-8811

石川内科クリニック
〒486-0841
愛知県春日井市南下原町22-1
TEL：0568-87-6800

(審)16VIII022